

日本語研修コース（大学院予備教育）同窓会出席者によるコース評価（三浦・古本）

日本語研修コース（大学院予備教育）同窓会出席者によるコース評価

三浦 香苗・古本 裕子

要旨

大学院予備教育日本語研修コースの点検評価の一部として、1997年から2001年まで計5回にわたって毎年3月に行ってきた同窓会・調査の概要を述べ、集まった修了生の属性と出席の関係、修了生によるコース評価を分析し、以下の結果を得た。

同窓会に「一度でも出席した人」と「一度も出席しなかった人」の属性を調べた。明らかになったことのうち、主なものは次のようである。中・上級クラスの者よりゼロ初級クラスの者の方が、研究留学生より教員研究生の方が、出席の割合が高い。進学先大学によって出席の割合が異なる。コース修了時の成績と出席には関係が見られない。

コース評価として、コースの内容が良かったか、修了後役に立ったかを質問した。コース全体としてはかなり高い評価、また役に立っているという評価を得た。個々の項目では、専門課程での研究に影響を及ぼす口頭発表、漢字、コンピュータ、ビデオの授業等の評価が高く、また修了後役に立っていると評価された。これらはコースを離れた後の専門領域での研究活動を直接的あるいは間接的に支えるものである。

以上のことから、専門への橋渡しを考慮した本コースの方向性に対し、一応の評価を得たと考える。

キーワード

日本語研修コース，専門への橋渡し，点検評価，同窓会

はじめに

大学院予備教育日本語研修コース生は、二つの相容れない条件下に置かれている。すなわち、日本での研究と学位取得を目的としているにもかかわらず、その大半のものが日本語力ゼロに近いレベルから始めて、わずか半年の日本語学習期間しか与えられていない、という条件である。コース担当者の課題は、このような留学生に対し、専門の入り口までの長い道のりを、どのように凝縮して走らせるかということである。

本稿では、コースの点検・評価と改善のために、コース開設以来、毎年3月に行ってきた同窓会・調査について簡単に報告し、同窓会出席者の属性とコース評価を分析した結果を述べる。その結果を、専門を視野に入れた初級日本語教育を考える上での参考にしようというものである。

なお、同窓会時に修了生の進学先研究室での日本語使用状況も調査しているが、その分析は「日本語研修コース修了生の研究生活における日本語使用」（早川ほか 2002 本誌に掲載）に記した。

I . 同窓会・日本語使用状況調査の概要

A) コース概要

大学院予備教育日本語集中コース（略して日本語研修コース）は、毎年前期4月－9月と後期10月－3月に新しい国費留学生を受け入れる6ヶ月の集中日本語プログラムである。このコースは 1995年10月受け入れの第1期生から、2001年4月受け入れの第12期生までで、計133人の（128＋5 特別参加）修了生を出している。

每期8人～15人程度の研修生中、来日時日本語力は、ほとんどの者がゼロ初級（日本語で簡単な挨拶もできない程度）であり、每期2人～4人程度が日本語既習者である。

B) 同窓会・調査の目的

日本語研修コースでは、1997年から2001年まで計5回にわたって、毎年3月にコース修了生を集めて、日本語に関する調査を兼ねた同窓会を行ってきた。

その目的は、以下のことを知って、コースの点検評価を行い改善に役立てることである。

①修了生の修了後の日本語使用状況、②修了後、日本語研修コースでの日本語学習がどのように役立ったか、③修了後、研修コースに対する評価が変化したか、どう変化したか、④修了生のその後の日本語力の発達。

また、この集まりは、他の機能も果たしている。すなわち、新旧修了生の出会いの場、教師、クラスメート、先輩、後輩、日本人学生との旧交をあたためる場、情報交換の場でもある。なお、県外から出席する修了生には、旅費を支払った。

3 . 同窓会・調査の構成

同窓会・調査の構成と方法は、年々改良を試みたため、年度によって多少の差があ

る。毎年必ず行ったことは、①メンバーの自己紹介と全体会議（テーマに沿った話：「将来の夢」「専門」「コース修了後の生活の問題点」等）、②金大留学生センターで受けた日本語研修コースを振り返って、同窓会の時点で行うコース評価（アンケート用紙に記入）、③個人面談による聞き取り調査、④懇親会、である。

③の聞き取り調査の内容は、初回から第3回までと、第4回と第5回のあいだに変化があった。初回から第3回までは、i. 進学先での日本語使用状況についての教師の質問（日本語）に答えること、ii. 日本語力を測るための口答試験（テーマに基づいて話す）であった。第4回からは、ii を省略し、i を詳しく話すこととした。また、希望者には日本語能力試験の模擬試験（3級と2級）を受けさせたが、希望者のない年もあった。

4. 同窓会・調査への出席者

以下にこれまで行った同窓会・調査への出席者数とその内訳を記す。当該年の3月に修了したばかりの留学生は、全体会議のみに出席し、聞き取り調査対象にはならなかったため、数に含めない。

進学先大学の名称は以下の短縮形を使用した。

金＝金沢大学、福井＝福井大学、富山＝富山大学、富山医薬＝富山医科薬科大学、福井医＝福井医科大学、新潟国際＝新潟国際大学、先端＝北陸先端大学院大学、上越＝上越教育大学、美＝金沢美術工芸大学、東京＝東京大学、東工＝東京工業大学

表1 同窓会・調査への出席者

回	年 月	出席数	出席者内訳（進学大学別）	出席者内訳（期別）
1	1997年 3月	14	金 6, 福井 6, 富山 2	1期生 5, 2期生 9
2	1998年 3月	23	金 6, 福井 9, 富山 3, 富山医薬 2, 新潟国際 1, 先端 1, 上越 1	1期生 1, 2期生 8, 3期生 9, 4期生 5
3	1999年 3月	13	金 3, 福井 5, 富山 1, 富山医薬 1, 新潟国際 1, 先端 1, 上越 1	2期生 2, 3期生 2, 4期生 5, 5期生 3, 6期生 1
4	2000年 3月	35	金 14, 福井 10, 富山 1, 富山医薬 3, 先端 2, 上越 1, 美 2, 福井医 1, 無職 1	1期生 2, 2期生 4, 3期生 3, 4期生 3, 5期生 1, 6期生 4, 7期生 8, 8期生 10
5	2001年 3月	28	金 5, 福井 12, 富山 2, 富山医薬 1, 先端 3, 上越 1, 福井医 1, 東京 1, 東工 1, 企業 1	2期生 3, 3期生 2, 4期生 3, 5期生 1, 6期生 2, 7期生 2, 8期生 5, 9期生 7, 10期生 3

II . 修了生の属性と同窓会・調査への出席の関係

第1期生から第10期生までの日本語研修コース修了生113人のうち,第1回同窓会から第5回までに一度でも出席した人は69人(61.1%),一度も出席しなかった人は44人(38.9%)であった。この章では,この両者間の傾向を検討する。

1 . 在籍した時期による差

日本語研修コースに在籍した時期によって,「一度でも出席した人」の割合に差があった(表2, $P < 0.01$, χ^2 分析)。特に1,2期の修了生は,「一度でも出席した人」の割合が非常に高く(93.3%),9,10期の修了生は40.0%で低かった。早い時期の修了生は同窓会のチャンスが多く,出席する可能性も高くなるのだろう。

表2 修了した時期別の「一度でも出席した人」の割合

	1・2期	3・4期	5・6期	7・8期	9・10期	合計
一度でも出席した人	14 93.3%	16 61.5%	8 44.4%	21 72.4%	10 40.0%	69 61.1%
一度も出席しなかった人	1 6.7%	10 38.5%	10 55.6%	8 27.6%	15 60.0%	44 38.9%
合 計	15 100%	26 100%	18 100%	29 100%	25 100%	113 100%

2 . 日本語力(ゼロ初級,中・上級)による差

日本語研修コースでは,来日時点で日本語の学習歴がほとんどなくゼロ初級から学習した学生と(ゼロ初級と呼ぶ),それ以外の学生(中・上級と呼ぶ)とがいる。中・上級の学生は,ふだんは総合コースの授業に出席しており,ゼロ初級の学生といっしょに学習するのは,コンピュータ,口頭発表プロジェクト,日本人学生との時間など限られた時間だけであった。

ゼロ初級の学生と中・上級の学生の同窓会への出席状況を比較すると(表3),有意差はなかったが,ゼロ初級の学生のほうが,一度でも同窓会に出席する割合が高い傾向が見られた。 $(P < 0.1$, Fisherの正確確率法検定)

中・上級の学生は,日本語研修コース在籍中も皆と行動を共にすることが少なく,もともと帰属意識が高くなかったのだろうと思われる。

表3 学生のレベルと「一度でも出席した」人の割合

	ゼロ初級の学生	中・上級の学生	合計
一度でも出席した人	61 (64.9%)	8 (42.1%)	69 (61.1%)
一度も出席しなかった人	33 (35.1%)	11 (57.9%)	44 (38.9%)
合 計	94 (100.0%)	19 (100.0%)	113 (100.0%)

3. 進学先大学による差

コース修了生が進学する数が多い6大学について、一度でも出席した人と、一度も出席しなかった人の割合を調べてみると（表4）、大学によってその割合が違っていた（ $P < 0.01$, χ^2 分析）。福井大学、富山大学の割合は高かったが、比較的近い北陸先端科学技術大学院大学は低かった。金沢大学も57.5%に留まっている。これは旅費が出ないことや、金沢という土地自体に帰ってくる楽しみがないことが関係していると思われる。新潟国際大学からは遠方であるためか、出席者が少ない。

しかし、一方では東京工業大学、上越教育大から駆けつけてきた人もいることを考えると、この催しの意義が大きいといえることができるであろう。

表4 進学先大学と「一度でも出席した人」の割合

	福井大学	金沢大学	北陸先端 科学技術 大学院大	富山医科 薬科大学	富山大学	新潟 国際大学	その他	合計
一度でも出席した人	23 85.2%	23 57.5%	4 28.6%	6 60.0%	6 85.7%	1 16.7%	6 66.7%	69 61.1%
一度も出席しなかった人	4 14.8%	17 42.5%	10 71.4%	4 40.0%	1 14.3%	5 83.3%	3 33.3%	44 38.9%
合 計	27 100.0%	40 100.0%	14 100.0%	10 100.0%	7 100.0%	6 100.0%	9 100.0%	113 100.0%

4. 研修生の身分の違いによる差

日本語研修コースには、大学院での研究を目指す研究留学生と現職教員研修生とが在籍する。教員研修生は研究留学生に比べて、同窓会に一回でも出席した人の割合が多い（表4、 $P < 0.05$, χ^2 分析）。教員研修生は研修修了後1年程度で帰国するケースが多く、その挨拶を兼ねて出席するため、出席する割合が高いと思われる。一方研究留学生は、日本に5年間滞在するが、その間、博士課程進学などで忙しく出席できない場合もあると思われる。

表5 身分の違いによる一度でも出席した人の割合

	研究留学生	教員研修生	合 計
一度でも出席した人	46 (55.4%)	23 (76.7%)	69 (61.1%)
一度も出席しなかった人	37 (44.6%)	7 (23.3%)	44 (38.9%)
合 計	83 (100.0%)	30 (100.0%)	113 (100.0%)

5 . 研修時の成績による差

同窓会には成績がよかった学生が集まったのだろうか。日本語研修コースでゼロ初級に在籍した学生92人は、全期を通して統一した基準で成績がつけられている。この結果と、同窓会に一度でも出席することが関係あるかを調べた(表6)。A, B, Cの成績にそれぞれ, 3, 2, 1の点数を振り当て平均値を計算すると、「一度も出席しなかった人」(平均2.65)より「一度でも出席した人」(平均2.55)の方がむしろ平均値が低かったが、その差は有意ではなかった。このことから、成績がよかった学生ばかりが同窓会に出席しているのではないことがわかる。

これは、日本人の同窓会にも一般的に言えることであるが、どんな成績の学生も、懐かしい先生や友達の顔を見たいという気持ちで集まってくるのではないか。なお、中・上級クラスにいた学生は総合コースのクラス別に成績が出されており、統一した基準でつけられていないため、ここでの検討の対象となっていない。

表6 「一度でも出席した人」と「一度も出席しなかった人」の研修時の成績の差

	人 数	成績の平均	標準偏差
一度でも出席した人	60	2.55	0.75
一度も出席しなかった人	32	2.63	0.66
合 計	92	2.58	0.72

6 . まとめ

本章の結果をまとめると次のようである。

- ① 日本語研修コースに在籍した時期によって、「一度でも出席した人」の割合に差がある。早い時期の修了生の方が割合が高く、最近の修了生の割合が低い。
- ② ゼロ初級の学生の方が「一度でも出席した人」の割合が高い傾向が見られる。
- ③ 進学先大学によって「一度でも出席した人」の割合が違う。福井、富山大学

が高い。

- ④ 教員研修生の方が研究留学生より「一度でも出席した人」の割合が高い。
- ⑤ コース修了時の成績と「一度でも出席した人」の割合は関係がない。

Ⅲ．コース評価アンケート

本章では、第5回同窓会・調査（2001年3月）に出席した修了生によるコース評価アンケートを分析した結果を述べる。また、この評価がコース修了直後に行った評価と違いがあるか、どんな違いがあるかも見る。

1．コース評価アンケート調査の方法と対象

日本語で書かれた質問用紙に書き込む方式で行った。質問用紙はA4用紙1枚で、各項目について4段階評価する。「4 はい、たいへん。 3 はい、すこし。 2 いいえ、あまり。 1 いいえ、ぜんぜん。」のどれかに丸をつける。質問項目は、例えば、コース全体、教科書、教師の教え方、口頭発表プロジェクト、日本人学生との活動等である。各項目について、「今振り返ってみてどう評価するか」と「修了後の研究／生活に役立っているか」という二つの点から評価してもらった。質問紙は日本語で書かれているため、希望する修了生には日本人学生が内容を説明した。

ここで分析するのは、2001年度第5回同窓会時に行われたもので、アンケートの調査人数は25人（2期3人、3期2人、4期1人、5期1人、6期2人、7期2人、8期5人、9期6人、10期3人）である。

2．結果

「今振り返ってみてコースをどう評価するか」（「コースはよかったか」と「修了後の研究／生活に役立っているか」（「コースは役に立ったか）」についての回答を項目ごとに平均した数値は、次の表7のようである。

なお、この表7の中のコース直後の評価というのは、日本語研修コース修了直後に行われているコース評価のことである。同窓会のアンケートの回答者が、コース修了直後のアンケートに回答した内容を抜き出し、平均したものである。コース修了直後も、評価は4段階で行われている。項目は、同窓会時のアンケートの項目に該当する部分、または関係する部分を平均したものを取りあげた。

1) 同窓会時のコース評価

	コース直後の評価		同窓会時のコース評価			
			コースはよかったか		コースは役に立ったか	
	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差
コース全体	3.7	0.47	3.8	0.41	3.7	0.56
教 え 方	3.7	0.49	3.6	0.59	—	—
デ ザ イ ン	3.2	0.28	3.1	0.67	—	—
教 科 書	3.7	0.49	3.2	0.64	—	—
授 業 速 さ	3.1	0.67	3.3	0.66	—	—
授業難しさ	-	-	3.0	0.89	—	—
試 験	3.3	0.52	3.2	0.62	3.3	0.70
宿 題	3.4	0.79	3.2	0.83	3.2	0.75
行 事	-	-	3.1	0.67	3.1	0.71
文 集	3.4	0.51	3.5	0.51	3.2	0.70
口頭発表 プロジェクト	3.3	0.47	3.4	0.51	3.4	0.80
ドラマ プロジェクト*	-	—	3.9	0.38	3.0	0.82
文 法	3.6	0.48	3.5	0.60	3.5	0.60
コンピュータ	3.5	0.52	3.4	0.67	3.5	0.74
漢 字	3.8	0.40	3.4	0.68	3.4	0.75
日本人学生との 時間	3.2	0.33	3.0	0.94	3.1	1.01
歌	3.3	0.49	3.1	0.70	3.0	0.75
ビ デ オ	3.6	0.51	3.4	0.60	3.4	0.68
相 談	3.2	0.83	3.1	0.78	3.1	0.83

—は該当する数値がないことを示す *ドラマプロジェクトは回答者数が4人である。

このコース全体に対する評価は、その他の下位項目に対する評価と比べて高く、多くの項目との差が有意であった。(教え方、口頭発表プロジェクト、文法、以外の項目との差、 $P < 0.05$, Wilcoxon の符号順位検定) なお、ドラマについては実施年数が短いため回答者が4人と少なく、検定はできない。

しかし、下位項目についての評価もすべての項目の平均が3.0以上で、「よかった」と判定されている。3.4以上の評価を受けているのは、教え方3.6、文集3.5、口頭発表

プロジェクト3.4，ドラマ3.9，文法3.6，コンピュータ3.4，漢字3.4，ビデオ3.4である。

2) 同窓会時とコース修了時のコース評価の比較

日本語研修コース修了時のコース評価の平均が3.4以上で高かったものを見ると，コース全体3.7をはじめとして，教え方3.7，教科書3.7，宿題3.4，文集3.4，文法3.6，コンピュータ3.5，漢字3.8，ビデオ3.6があげられる。同窓会時に3.4以上であった項目と一致するのは，宿題と教科書以外の項目全てである。これらは一貫して学生から良い評価を得ていることになる。同窓会時とコース修了時のコース評価とをそれぞれの項目毎に比較してみたが，有意な差があるものはなかった。

ここで言えることは，学生はコース修了直後の印象をそのまま持ち続けているということである。6ヶ月以上前に，人によっては数年前に行われた調査での評価が変化しにくいということは，日本語研修コースで受けた印象が鮮明だということが分かる。したがって，コース直後の評価は一時的な感情に左右されたものではなく，しっかりした価値基準に基づいて判断されていたことになる。

但し，教科書に関しては，有意ではないが評価が大きく下がっている。教科書は『新日本語の基礎1.2』（1期から6期まで），『みんなの日本語1.2』（7期以降）を使っている。研修終了後，留学生会館から出て普通の日本人社会の中で生活を始めた場合，教科書と実際に使われる日本語との差を感じたのかもしれない。

3) 修了後役に立っている項目

コースで勉強したことが修了後役に立っているかどうかを聞いた結果も，コース全体としては3.7と非常に役に立つという評価を得ている。下位項目の平均も全て3.0以上である。

3.4以上のものを挙げると，コース全体が3.7，口頭発表プロジェクト3.4，文法3.5，コンピュータ3.5，漢字3.4，ビデオ3.4である。これら全ては，コースがよかったかを聞いた際にも上位にあげられていたものである。

修了後役に立ったかという評価と，同窓会時に聞かれたコース評価との比較をしたが，どの差も有意ではなかった。あえて変化のあるものをあげると，ドラマプロジェクト（「よかったか」に対する解答が3.9で，「役に立ったか」に対する解答が3.0）があげられる。この項目は回答者がまだ少なく，平均値が安定したものとはいえない。しかし，解答した者はプロジェクト自体は非常によかったが（三浦・山口 2000），それが同じ程度に役に立っているとは言えないと思っていることを示している。回答数を増やして調査する必要があるだろう。

4) 専門課程と役に立っている項目の関係

上の3)で高い評価を得た口頭発表プロジェクト等は、専門への橋渡しとしての役割を担っているものである。

口頭発表プロジェクトとコンピュータは、専門課程に進学した後、最も「日本語研修コースで習っていてよかった」と感じるものであろう。口頭発表プロジェクトでは、研究テーマの絞り方、アンケート項目の設定方法、アンケート調査、データ入力、その分析、検定、発表アウトラインの書き方、発表原稿の書き方、発表の音声や態度・しぐさ等が指導される。コンピュータ授業には、日本語ワープロの使い方から始まって、データ入力の方法、分析ソフトの使い方、パワーポイントを使った発表スライドの作り方、インターネットからの映像などの取り入れ方、スキャナーやプロジェクターの使い方等が盛り込まれている。

また、漢字は、専門語彙を学ぶためにも必須のものである。文法の授業は、ふだんの口頭練習を主とした授業を支えるためのもので、週1回から2回、英語も混じえて行われ、知識とその運用を目的とする。基礎文法の正確な知識と運用力は、専門過程での勉強に役立つはずである。ビデオの授業では、日本での生活に必要な知識を、文化的背景、状況、動作等を含めて学ぶことができる。

いずれも、初級日本語コースを離れた後の専門領域での研究活動を直接的あるいは間接的に支えるものである。

4. まとめ

同窓会の時に研修生に対し、日本語研修コースの勉強がよかったか、役にたったかを聞いた結果、次のことが明らかになった。

- ① コース全体としてはかなり高い評価、また役に立ったという評価を得た。
- ② 下位項目では、教え方、文集、文法、コンピュータ、漢字、ビデオなどの項目がよかったと判定されており、これらは研修修了直後にとられたアンケートと一致した結果を示した。
- ③ また、これらの項目は役に立ったという判定も高かった（教え方を除く）。
- ④ それぞれの項目の内容については各期で同じではないが、学生は日々の普通の勉強項目、例えばドリル練習、宿題、試験などよりも、少し変化のある部分を高く評価している。
- ⑤ 日本語研修コース修了後の生活で見直された項目は発見できなかったが、一方では、コース修了直後の印象が維持されていることがわかった。

Ⅳ． 総括

以上、大学院予備教育日本語研修コースの点検評価の一部として、同窓会・調査の概要、集まった修了生の属性と出席の関係、修了生によるコース評価について述べた。

同窓会を行うこと自体の是非については、優等生だけが出席するのではないこと、帰国の時期が迫った教員研修生の出席が多いこと、また本論では触れなかったが、進学先の大学でうまくいっている者も不遇をかこっている者も出席していること等を考えると、この集まりを行う意義はあると思われる。

修了生によるコース評価は、コース全体としてかなり高く、また修了後役に立っているというものであった。個々の項目では、専門課程での研究に影響を及ぼす口頭発表、漢字、コンピュータ、ビデオの授業等の評価が高く、修了後役に立っていると評価された。これらはコースを離れた後の専門領域での研究活動を直接的あるいは間接的に支えるものである。

日本での学位取得を目指す学生に対し初級日本語しか与えられないという矛盾を抱え、専門への橋渡しを考慮した本コースであるが、一応の評価を得たと考える。多くの示唆も得た。今後、コース生達の留学の目的達成を一層強力に支えるコースへと改善をはかっていきたい。

【参考文献】

- 早川幸子・島弘子・三浦香苗（2002）「日本語研修コース修了生の研究活動における日本語使用」『金沢大学留学生センター紀要』Vol.5, 39-56
- 古本裕子・早川幸子・島弘子・三浦香苗（1999）「専門教育における留学生の口頭発表(1)専門教育について」『金沢大学留学生センター紀要』Vol.2, 29-47
- 三浦香苗・深澤のぞみ・岡沢孝雄（1997）『5ヶ月で口頭発表－1997試作版』金沢大学留学生センター
- 三浦香苗・深澤のぞみ（1998）「留学生の口頭発表に対する評価を探る－本当に伝えたいことが伝わるためにはなにが必要か－」『金沢大学留学生センター紀要』Vol.1,1-15
- 三浦香苗（1998）「初級段階の口頭発表プロジェクト－受信から発信へ－」平成10年度日本語教育学会秋期大会予稿集，日本語教育学会，61-66
- 三浦香苗・島弘子・古本裕子・早川幸子（1999）「専門教育における留学生の口頭発表(1)指導について」『金沢大学留学生センター紀要』Vol.2, 1-27
- 三浦香苗・山口実千代（2000）「初級集中コースのドラマプロジェクトは有効か－漫画読解，日本事情を経て，ドラマを含んだ研究発表に至る－」2000年度日本語教育学会秋季大会予稿集，日本語教育学会，154-159

Evaluation of the Intensive Japanese Language Program (Preparation for Graduate Study) as per Attendees at the Program Reunion

Kanae Miura , Yuko Furumoto

ABSTRACT

As a part of an evaluative study of the Intensive Language Program designed to prepare international students for graduate-level study, we have collected the results of a survey given to program graduates participating in the annual reunion held in March between 1997 and 2001. Data was analyzed for correlation between student characteristics and attendance and their evaluation of the program, producing the results below.

Investigating the difference between students who had a) participated in the reunion one or more times, and b) never participated, the following major points became clear:

Students who had begun the course with no prior Japanese language experience and students from the teacher training program recorded higher levels of attendance when compared to intermediate/advanced students and research students. Attendance was also found to vary according to the university they attended after graduating. No relationship was found between grades (performance) and attendance.

Graduates were also asked whether they were satisfied with the Program content and whether their studies proved to be of use to them after completion. Evaluation of the course was quite positive, and graduates confirmed that their studies were of use in their pursuits. Graduates also rated computer, video, kanji, and oral presentation classes particularly highly, mentioning that they were of immediate use in their research work.

On the basis of these results, we believe that we have acquired a sense of the direction and purpose of our program in its mission to prepare students for specialized study and research.